岩船
生田敦盛
接待
木曽願書
鍾馗

十三

岩船

ワキ二人 実治る四方の国々関の戸
さゝて通ん　抑是ハ当今に仕へ
奉る臣下也扨も我君賢王にまし
ますに依て吹風枝をならさす民と
さしもさゝす誠に目出度御代なり
去程に摂州住吉の浦に始て浜の

さてこそ唐の寶を買とるべし
との宣旨に任せ只今津の國住吉
の浦に下向仕り何事も心に叶ふ
此時のうぐひすめしをありや日の本
君國豊のあきつ洲の浪を治
あまねき四の海唐土も隣あれ
ぐ川きんの道末家に津守の浦に

着にけり松風も長閑に立つや
住吉の市若ちまさる賑はし道
里小野の草葉までも君のめぐみに
よるとも知らじ又影滿十里の外まで
身も宮の所も住吉の神と君と
の隔てなきは樂みぞぬしきるが
きみのゆくすゑ代とのさかへと家

みな事をぬるとりでまよそへて
千世までくをへしき君のな君
いつくもの一日の下君りまぬとりけ
そなはりきいざく市に出堀の
月面白き松の風伊勢志まや塩干
まうへまくもぐ待えよきを
里の洲の代よあるむのむ明かまうぬ

時しを生きさらば民豊かなるその
こを何よとしえん様津までやまを
ろこしを隔て宝の宝の市に出す
よたうの市に出かよ 不思議中れ
市人あまろ多き中よ見えまる者
をよそはじ唐人にまぬ声を
大和詞しゆきんさんなむをあへて

持たりたことは身ハいかなる人そ
きんゆうの時は代々とあつまれり
よりて見るあるは玉ハ私に持つる寳
あれはこそ代りに日出度は代々まされハ
竜女か寳珠は思石と似へ見ハ君
に捧かり　右経しく支治まれは
代のあるしには賢人を山よりいて

聖人を君に進らするといへり然るへは
身ハ賤き者はへすらい寳を持るよりも
委参国戸捧しあらまほしきことと
とひかりや唐より洛の玉をとても寳
珠の外に是ぬ者あり見を律身
の浦に玉心のよしかし思石珠　心意
玉とし是いふへかさるへく女ぬ者に

如意寶珠を我君にさゝけ奉り
又賀貞王の御代まても久に天を納
受し地をうるほひ民の寶を出
現せり　実く今の御代の有
擴治めぬ國をまつらうあひきたる
さうみ四方の国　さゝ波寶やこゝ波
見よや　唐土舟も西の海　青き

底の波まより　我つまもあり住吉の
神を守りの道もくに　宮居に幸
を住吉の神と君とへゆきあひの
まのゆくるあらうみそぎ君の光り
そめくさゝ子世まもときく
うゝ市の数りしけしく四方のりと
めまへもうく住吉の濱まて市寶の

穀をうかべしや雲の上人一時の
千金をまねいてぞこゝへあし住
吉の岸がうらぬちあひぬ金銀珠
玉いろいろ　千顆万顆の玉衣裳
浦は津守の宮柱立つ市なれば穀
うけてよこのきをつくこそその
見上げる錦あや衣袂を秋まで

夕月の影にや淡路がた　絵島が
磯はあまのめぐらす雲のひまより捨小
舟よるよる出すよる　住吉の岸がね
波はまろく入松吹風はなほも
高まれてとおもしろの五四の絃
の音さえとめしまさやかの江とり
丸屋をよいよろ海さし面白の浦

きゝきや又岩舟のよるの宮月の
あまりよ急くへしいとはやて人とよ
そも岩舟のよりくることハ宝の
人屋らん　宮人くハよそ志らじ天
も納受法見城の寶を宮よゐる
さんとて天の磐船雲の波よ浮
宮よよひへまし　とハなよちつむ

へさい呉岩舟を漕よ磯しあま人さく
めハ我そうじとひきる天の岩舟
寄せてそ秋津嶋孫ハ宮始住吉
の雲の心とりれ宮　雲嵐と九よ
失はきりく　久かたの天のさく
めの岩舟をとめし　神代の我久し
我ハ昼も下界よまとして神をうや

まし君を守ら様津浦の竜神也
あはれ神代のためしかとうれし
又今治まる代に出て寶の舟を
守護し奉り勅をおもうやく
〃岩舟寶をよせる波の鼓拍子
を揃てえいやゑいやとひきや岩舟
あまのさくめか波の音鼓てい

とうの拍子を打まりやかゝらちあと
えめらり廻りて住吉の松風
吹よ嵐よ急いさえいけう急いさと
おもやうら縁のくうらのうち
くる浪よりうんで大竜王は海上
よみ行しば舟のはあらくとまよ
くりのうまれ塩よひるまひ波よの川

てだうか居をめでしき住吉乃岸に
寶乃御舟をつきおさめ数も数
万乃捧物はこび出すや濱乃
まさご金銀珠玉ハぬりこめて山
乃ごとくに津守乃うらに君を
守り乃神ハ千世まてさかふる御代
とぞなりにける

ワキ詞

生田敦盛

是ハ黒谷法然上人に仕へ申者に
て候さても是に渡り候幼き人ハ
上人賀茂へ御参詣ノ下向の時さがり
松の下に二歳ばかりなる男子乃
うつくしきが手箱乃蓋に入て寺
常に抱へ捨置しを上人不便

思ひ奉らはいま世は悔しかるへくなきと
すてて給ひし御跡をたつねや十三歳に
御身の御父母乃御なけきを歎給ひ
御ほうよう説法を授けまいらせ候の
かくして誕生の中よりひかりさす安
性乃表出つる我子なくて由緒なけれは
うたに詠む人をしこ一年十一乃答なく尋

きたりしに敦盛の御子にておはしま
し給ひけるを世に由ひて多くの成
らも父乃姿をたつね給ひゆくとかく
我乃明神へまゐりたまへと由に仰られ
て二七日籠り給ひし夜半御まくらに
ほうよ御前にかくかくの明神へ参る
よりてはやかくかくの明神みえ給ひ

よく御祈誓あれ

子方サシ 神籬や。うちあらはるゝ社乃あきの玉垣神さびて。ごころをしもめぐらす御手洗の流れは絶ぬ。恵を頼むあまりにも愛子なりけるもた。親も顔の其面影を一目見まほしく。まづ祈る心をあはれとおぼしめし。三たびまで漏へ参り御祈誓なし申す

こゝに頼みを叶へたまへと祈りしく

子詞 有難やまどろむ睡眠のうちにあらたなる霊夢を蒙りては

口詞 何と霊夢を蒙りたるとや。いかなる霊夢にて候ぞ物語候へ

子 有難や御宝殿のうちよりもあらたなる御声にて。父が姿を見たくば。行くと思へば是より摂津国生田の森

御下向しとあしたの霊夢を蒙り
て候　是よりすぐに成らせ給へ
黒谷への御便りもなく候が
生田の森へ御供仕り候ふやうく
松の戸を立出る山陰の賀茂の宮
居を立出でゝいそく行けば程なく山
崎や宝寺のよそに見て水瀬の川をこえ

みかも猿衣秋の末の月日に
ごとく思はず津の国の生田の森
に着きにけり　御急候ほどに
是ははやはや生田に着きて候
乃森の流れ都にて聞き及びたるよりも
いや増して面白き所にて候ぞあれに
見えたる野辺は生田の小野にて候

やかましや立寄り嫁ぢやと思ひ候ひつる
かりそめに嫁は猶ぞ早見の夢ながらはれ
つくにおきて燈乃影はみてはなき人
家あらく有きにんちら立寄宿かくらき
やと思ひ候
五蘊をとかくこれ
皆空行よりいでゝ平生は我もな袈
きんじ苦ちを守るいそうしは夜月ままひ
扇をもうしは盛くしき松風に嘯く
おもう緑をも此折からやき
きやおかまさ見いまよ乃房のうちのさきも
恥やのちまる行武者は甲冑を帯し
みる綺ふさやはまいかす秋さやうん
拝縁の此人哉こうろやおの面とは見えしま
更にかまし我に對面の為らすはちや

ばかりなりける古への歎きの幽霊まで
なりけり　あら歎かしの我父
の心にも違ひける[illegible]
まりかれこそ[illegible]まはる
當麻[illegible]あまりのもとに[illegible]
ありあまる計[illegible]ぞ頼
[illegible]御寺に頼みまゐらする

むかしやおほゐの天皇の御宇かとよ
[illegible]やの右大臣とよなりの御娘
[illegible]の浄土の経をよませ給ふあひだ
ちすも極楽の御心の故
かくて[illegible]の御子[illegible]
なりし我父の[illegible]
給へと祈誓申せば明神あらはれ給ひて

志まし焔王入り作つかはまる焔君
を殺りだ志ゝみは眼をとはり叔まり親
子兄弟りも人をを限りなき師し
かまちり月みよりとはるむつ飛いざや
故つゝし叔ら平家乃榮花を極
しきのつめ須磨風月は店と宅
移奇管絃乃極とよきな林をなら

連なしにいかめる打の京りきし木営
乃うまり魚ちく左大みちゆ甘骨子
於とさ叔ち皇とを始なり一門乃人
をさまとく見紀乃都を立いく西海
村うに稲をろの猶なる振の首上れ
扇止てとる海ぞうく志ゝいつま
むかる鄙は住居乃ならまりしに又立

ゆふしほ浪乃淀しの山路や一乃谷
田乃海より思しりハごろ都をしりぞきと
一門乃人々をよろこびもとむ折節よ
範頼義経ハその勢雲霞乃ごと
皆々戦ひとも平家乃運も
はさ弓乃やうけちらふよしくと
諸散とあれなりて討も深き生田

乃ぶ身を捨し物語ぞよしながら
子けるうかりやあらはしちさう乃
假の世のまよひやこゝろの袖のうら
吉
名残はつきぬ心の那　あれよみえ
たるハいかなる者ぞ行焔王より
御使こや時乃移とあまりおそしとて
乃返しまゐらせよと焔王つとむるを

上　いかりをなしてかゝるやあまくもの山まで
あるは立騒ぎ猛火ともなれは剣となり
ありし修羅のかたちを顕し
地をひゞかしみだれあへり
雷雲にちきりつる修羅のかたちそかし
しばし太刀をぬきもちてかきつくるや
かりに見えつる苦をしのびて

戦ひかなしくつきぬれば星も月も消え
かたきは修羅のかたきとなりて皆消
うせて月澄渡りて明くる
暁の空と成ぬれば恥かしや
そなたはしかるものとみる事
よそ目にはゆりてあさましの浦の霰に
さらくさまに絵のごとくあさく消えを

引わけて立ける姿さへかきつの花小
野の浅路の露霜とわらへ
てかほかたきもなく

接待

次第
旅乃衣ハ篠懸乃　露けき袖や
しほるらん
殊ニ我物とをしこもまかり
まうでつく雲井の月をこそねの宮出
松嶋や象潟を東路けりていさ
きらもく　いうこ申せし山河に御体
ありあまれかつつ　然りかやはや御先に高

札の立てゝ御覧候へ「げにゝ佐藤の
館にて山伏摂待とありて御
座候「佐藤が館にて山伏摂
待のあるハ我らかための所あまりたる佐藤
かさらか憚みて摂待はさりあ
きうしと存候「是ハさ候へども
唯志ある摂待にて御座あるよし申されよ

てん「いかに誰かある「御前に候「山伏
達のつきたりさ候ぞ「十二人候
みえ候「さて出て対面申さう
「是成ハおさなき人なるが誰が子息にて
渡り候ぞ「是ハ佐藤次信が子にて候
「扨次信殿ハ御内にて候か「判官殿
の次信ハ八嶋の合戦にうたれし佐

早「さらば此摂待はいかなる人の御企にて候ぞ

子「判官殿十二人の山伏となり

奥へ御下りの由承り祖母にて候人

去年摂待をしそめしが天下をはゞかり

かくて十二人御入べし。早「判官殿

みな人は出家なく候はず

継信が弟忠信陳忍

まづ子を取られ給はんと御門へ御入

候へばはやいつ御たちまちて候。惣

じて出家を替られ皆この中より

ちまよひ出家をなしとおもひ。判「実是

いかにさかしく和いかに候はずとも。子「何をか申さん

ここに。シテ「山伏達はかくぞ仕り給ひ急有り

ともに。子「十二人御座候。シテ「いやましくの旧里を

十二人御座候

生し鶴の子の親子のかひなさに共にありけん

廿六
きたやまかしわか身かへて御前よ
条さ母へハかつかあはれ人のなかる
くたりよかる子ともの其の恥を顕はし
みるハかりの極たる傾りよ御まへうし
き心をうかしみて御前へりしまりて候
抑もしは古佐藤庄司か後家忠信
忠信か母みつくにや親子恩愛わ

うれの面をりよそふれつき人めをも
顕とまつハう此の恥をもりうちされ
みるハ久た去あつらけ持の侍を申よ
親子のあはれをしれ為みをあれ後生菩提
ともしおもふ 宗 嫡子次信ハ八島みて
うれたる忠信ハ都みて失せられ
うつれしに母ハ事なるさまうれて

さゞらり進みし山ぶしを志ら雨晴るゝ心や
おくり山を此摂待にもしめかくれを
たちてよみしめのうぢ一日に五人三人。
あるいはかゝるもぎ縁の事はまし海
さんざも十二人の是の始よくのぼり給ふ
こら我君を待まゐらするにつけても
あるじ更ふけ人参る事をもあられ

ご乃晩年に卒度御さをく仏のごれ
摂待の利生あらし　空しからまし
兄弟をみるにひとりも見ゑぬ悲しく
上言
親子よりも主従ぞ深き契りの
中なれば我君も哀とおぼし
めされ命をすてゝ
郎お乃独りの母がありける子ありやや

ちかひの御言葉をも出されまじきねば猶
猶さらねば力なく思ひのほかなれども
うらみ申さうちも母やく 見参
思ひもよらぬ子ながら候 あら物我らこそ
きの山伏の五人三人行つきよられ
母の僧かしこ夜は山伏侍十二人差
たまはせらく判官殿とはられ卒爾
ぬる子で候 あらおぼつかなや次信忠信
の母にて候へば海を越え判官殿の御消の
人の名字をも御存知なくしてかかる
名をかりて候ふべし 作の山ども
我子は御門の者 去ながら大方を推
量りともよものことはよもちらひをし
カ子フサ
いかに物申 山伏たち 御山伏を御

詣りてゆき　先唯にむかひまつる
宮僧ハ此御法乃中にもとくハ八乃巻許
みつく御乃おゐて此経の十か年
よミまゐらせ人なりたりや今思ひ出されけり
判官殿乃御乳母まし　おさ乃十郎権頭
兼房山伏になりて御ともにまかりける
山伏ハ三山伏となく渡りけり　これなる

出羽の国羽黒山より出たる宮僧にてぞ
いや是ハ播磨乃人の者にてゆきぞれ
をいかにと申すに此法をと播磨乃巻
十三の年継母とうらみあひかけちらし　故
庄司殿と要り次信忠信と申すまゝにこ
かくうきめを見る身の程を唯よりはかなく
されバ秋國乃人の事にありけるにかくして

てか様に候ふそれかし御供の中よリ播磨上座
人々たちにも是も思ひ出ては判官殿の
よりまいりしそめさせ給ひし時
狩人の姿にて参りあひしを佐藤字
継信忠信も御供と申し鷲尾の十
郎山伏なれハ参りたり 梅の申山
伏と成てこ山伏と知られ参らせ候ハそ

此御志こそ大事よて候へ彼の人の
聲うとおほへ候へとも猶思ひあへての拝みまいらせ
候ハぬ物にて候御まく物と申ハ何ともなし
數人のの候ひて候ハねハ是なる西塔
山伏ハきめしおくれたまへ中にも山の大
三塔一の勇僧候ふかなる君の一人
當年まれよのつかなる 武士もとの

哀なるかなやさしも召使はれし心
隔てなくましはりしあらはし給ふこと
今目もしらず居たり人めを忍
らひおはしますかくに忍ばせ給ふよ
おかくはいはで忍び給ふ上は
早此内へ御入候へ
判官 皆は誠次信の子
ならは判官殿とは知りまいらせ給ひ

子 久しき程になりて候へば十二人の山
伏の皆御顔を見申して候へば見知りて挨拶
まなく見知りまいらせ
判官 法そ見しらるべきことは
何故に候ぞ
子 其やいうに隠させ給ふ共
こもじ人々がちから御挨拶して知る事
あれこそ判官と見えさせ給ふよ
忘れても山伏ともの義経などはなるまじく

膝に懐きいだきけるや梅檀は二葉より
匂ふ身のまだいはけなき次信が子なりけると
云ば御前の人々目もみな涙をぞ流し
ける ワキ 今はなにをかつゝみ申べき我君
も山伏此中に御座候へ若
居も御覧じて御涙の有て此日に懸り申さ
れけれは シテ 一つは難やげに我君をおもへ
しまさぬとおもひつれてこそ此の事にて思
ひ出されて候へ ワキ 実にもむざんに候 シテ いかに
や上に次信が入道が最期の有様
図らずも申まゐらせず候ほどに御
きゝまゐらせて御心をも慰み給へ 判官 いかに
辨慶 ワキ 御前に候 判官 次信が入道が最
期の様をくはしく語つて若君に申

きく人是て御淀らぬ可ゟとてしび慈悲
に語つゞく咄を申して御前を立にけり
さても扨へ掛て八嶋乃合戦にかゝりけると
申されしに門脇殿の二男能登守教経
かしこに乗つれく小船に乗て参議同ちうく
漕よせいくさ源氏乃大将源九郎義経に
矢一筋まいらせんと語て兵とのきける

かゝり申さんを神として皆御矢面に又
なましきらず行と申しもなられしく
可与に次信忠心嗣信剛乃人にて御馬
乃前にかけきて寄りて義経是に有や
ころかゝりをおそかくしたりとて
其時に教経ハ引まかせきたちけれ
矢坪をさしてひようとはなつあやま

たゞ次信が着たりける鎧の胸板押
付きよ巻がきりはなし後へ抜けて射
こそしばたに給へ我君のすば着替の
事摺よちうと射し被母を附き次信は
ざりよみく無念なり無念なりけくしく
うれかさきの一年寿れなくりそてかま
よりよきとぞうそとめていやう我君あ馬

ちをのせ次信を陣のうしろへかきいれまで
次信いかにくくとの給へば次信くるしげなる息の下にて
よろこび給ひ絶えなば候となくなくほうしは南
目をひらき初語かく　母を附け涙に
忠信いはれぬ事なり申しけるか　ある愚や
忠信は日の出るよりも早く隠れまし候
けれども能登殿の童菊王丸次信が首

さて自然の方に志を渡させ忠信ひとへに
きみの名を重く主の為に射手を立てられしに
やしまの浦にて教経舟より引き詰めて放つ能登守
の矢に継信は立ち隠れ遠の舟に援の矢にかゝつて
ほどもなく舟にて空しくなりぬ眼前兄
の敵をば弟忠信に授け給ひし人
（地上歌）柵さも敵をも討ち将に従ひ申す御事哉

（ワキ詞）次信は又我が君の秘蔵にておはしまし候ふ御内
の人（シテ）その身は年寄家の舟のうち（ワキ上歌）皆
も源氏の陸の陣（シテ）それも又主従
（ワキ）ともに主従（シテ）思ひきりたる有様哉
なほ（ワキ）今の歌をばおもひあはせて
御前も御供にて（シテツレ）それは御存じもなく
如くにて鐙に立て去らぬ者へは

今世は無き面目なりぞ去ものゝ独り
ありたけ借りし笛でも扇かうをば山に座
敷よあるまじ十二人の山伏の中に三
人を残りなりて唯と名をも思ふくいづ
がいづくりへ(ま)ち其時義経老屋に
かゝり給ふ御鳴らく次信今ひまに
さらぬ時細めつゝかゝる人々をぞく見てを

きられく寿なきひよ次信は時は良
のたより申せし御馬を召されし御乗
替りにめされ十二世のおとひや二世の御
恩をもつて報謝をなさん命にさま
ろ露塵何の惜しからん去ものゝ鶴卿よ
べ句よ見の母と十よ…らんへわりゝ
事ぬ不便なりそがし心よりも雲の別よ

あはてなりし圍くゆかしく其時まことを
まして継ぎもなく悔やきかと明し
み郎あちまさ入ごと入から手ごと泡
忠勤まことに暈らは深まで治らせり
出て次信忠信が孫を尋ね出して命
の恩を報ぜんと思ふ事も空しく
我がりへのれ沙安まて、ちらかれたるも名哀

えぬうさ身の果こそ悲しけれ 母は猶も
み塘のゝ更らしは有明の朧
影盃を出し御肴に捧げまゐらすれ
きみやうやうなぐさみて、志ある人の情の盃
を頂きまつらせて その節こそ 鶴若扨は
うちかゝりける別れし父の御形見にて給
住むと思ひ出で十二人の山伏の経

我乃杖をもてぬまろびまるものちそくて
進みて勇めるありさま我も父に太刀をとらさんと
さまふ　去程に夜はほのぼのと明行
さらば暇申てかへらんとてやがて山宿を立
出る　いかに誰かある馬に鞍をおき
とゞまれよ君乃御供申さんを
ばよ　それも御供とは行ぬぞ　君乃

御供申てこそ親の敵をもうたせうずれ
うれしや弓矢乃はるもありげ思ひ候
乃山伏首途に行のかさはきあるべきこそ
左あらば思ひ出かたりさむ頭巾
篠懸をとりて揃へてたび給へ山伏首途
乃御供を舞　弁慶傍を押へ
ばかり申しし鶴若殿まで御供有た

くだきしハ道具を梅へ給ふ明日の迎
ひとしきりまちとおもふ中くに
神をもむかひまいる神もかまへもむ
ひたり急らんかと両をきゝくまとう
川まてづるけさいかまれ悲しさハ誠
うら心えなくぞ言葉かなうたる
打を得て客僧のおもてく宿をいる

まれ八ハ事老居の露着を抱いき ゆくハ
あかりいかるをあわれこぜ侍るやなきる
御るしく

木曽願書

八百萬代を治むなる弓矢の道こそゆゝしけれ 扨爰に木曽義仲とハ我身のまもり 扨て平家ハ都前のびうちの城を責落都へ合せ勢十萬餘騎で砺並山まで責上れ 家よりハ源氏かくて平家両陣あひさゝへ龍

虎乃威をふるひ獅子象にのりては帝
釈修羅の思ひをなし　日月を手に
うちつゞくあまきや梓弓の矢さ
きひの雲にひゞきときの聲は倶利加
羅が谷にとゞろきすさまじく山河草木も震
動すれは味方乃弁男明月に合戦を
解きては敵味方に矢をとさゝめ中を

ともなひし砺波山あたりまでこそ待居
かまはく　こゝに社の有　トモ 御前にあ
シテ あれ乃茂みの中に新しき社壇の見えした
るはいかなる神を勧請申さるゝぞ
尋ねさせ候へ　トモ 畏て候　いづれに社前に人の者
御り作り　コカシ 何とはしらず御名をそ
トモ あまりに新き社壇乃見えて候はいかさの御

神社勧請申てあるそ　御神候へ
めく八幡を勧請申ては今八幡とも
又荘前を羽生と申候ゆへ羽生の八幡
なと申候　其に上みは荘前の者共申
ては今へは新く八幡を勧請申候ども
八幡なと申し又羽生の八幡なと申を
申候　如此目出度事に候へは猶々

社も再興候はゝまゐらせて公学明をも立て
新出をもとめ候へ　長ては公方より学問
御しまい候へ追つき新書をも出して御さため
あまたの御鏡にては　長て候にも当
住よかみす　今井樋口をさして
めくりては数多き見皆悦の品
をかりさはきまゐり社壇よりしまひく信心

[illegible]
帰命頂礼八幡
大菩薩は日域朝帝の本主累世明君
の曩祖たり　寶祚をまもらんがため蒼
生を利せんが為に三身の金容をあら
はし三所の権扉をおしひらき給ふ
こゝにちかき頃年より平相国と

いふ者有て四海を管領して万民を
悩乱せしむ是既に仏法のあだ王法の敵也
将曾祖父前の陸奥守義家
宗廟の氏族に帰附せし義仲いやしく
もその後胤として首を傾て年久し今此大事
をおこす事たとへば嬰児の貝をもて巨海を測
蟷螂が斧をいからかして隆車に向ふがごとくなり

朝君乃為に忠ある身をあらハすの宝
あふき願くハ神明納受をたれ給ひ
勝事を瞬めのうちにあらそひ四方に退さしめ給
ゑ寿永二年五月日と高らかに讀上けれハ
義仲願書よりかふら矢を神前に捧申
さて源氏の若宮の矢のかふらせ給ひ
しハつて彼宝前に捧く南無帰命頂
禮ハ八幡大菩薩とて皆礼拝をし奉る
よろつかけ乃彼のこゝろの有かたきもえ
きゝき朝あしたに平家の軍兵臨よ
きけ右是ハ木曽殿の御代に今井の四
郎兼平と日追平の大勢と名乗て
きれ共拝ハ天地をひゝかすあつ
しと井の相図のこゑのよろこひ拝也

五万余騎が一万よきさきに成てとつくが
平家は大勢十萬餘騎ぐ時をこそ
あまし五月や起つらかハくらし巖石ハ是
ほのかにさきし味方も同士討すれども魚
鱗鶴翼完これかきるを渉
にく羽生は八幡の社壇のよかば史
一せうまうち源氏の軍兵乃圖て照

まで光の影ろくみまて鳩鳥が
載きて忍辱の門より悪魔降伏君
白羽乃かぶらの矢は平家の陣へ射ける
ところが平家の大勢乱物もとりあへず
倶利伽羅が谷の巖石のしたへ落
アヽ落重りく馬にハ人人にハ馬
重りおりくや露くつまし所山木の

柴のかりひちのことく七萬八千歳ハなを
かゝる谷乃千歳のかけをしるあさく
あれほとむかさりし

鍾馗

是ハ唐土終南山乃麓に住居する者
にて候我望ミあるに依間
唯今帝都に趣き候
終南山を立ち
出てゆく野草の露をかきわけて八雲村
小煙みち人屋高き眺め乃海路もなほ
うらこまちれた釣の小舟をかけてる浪よするほ

ちかひのあらはれゆく　シテ　なほ〳〵語り給へ
成仏へと申す事かな　地　何なりともそ
シテ　我むかし驚残の子細あるにより悪鬼
を亡し国土を守らんとの誓ひあり又
君賢人にておはし給へば宮中に現れ寿
瑞をあらはさんとのぶるの為参りて候へ
給へ　ワキ　是ハ不思議成事かな扨ハ御身

うちかはらんと　シテ　今ハ何をか包むべき
我ハ鍾馗といつし進士なるがかなはずして
きんに亡ぜし其執心のこる故世
かれのことあり　ワキ　扨ハ鍾馗の御有様
其て隠れなき進士なるが亡心をそ
御まへにて中々さとゆめかれ　ワキ　其の
めぐき　シテ　折からに　草露に声

志らじく寺めぐりかゝらあまく花松に
吹く風絶えくさへかゝるも松の登しぐれに
や行事を思ひてあはん色を香も絶え
みくそこの花紅葉つゆと所と宿めし
いつとうつとちなめし一生は風の前
の雲ぶ多の間に静かにやまく三界は水
ましのあわれまりれなあまきうしたんかうし

綺羅殿のうちには有為の悲しみをとつあり
翡翠帳のうちには漏の煩か
されどかや栄花の夢は花の日ならず
ますれどもげに衰への名力のむげなりける朝
の境に入へ減せさりがいぎ春さり秋来れば
花散り紫葉枯れ時うつりかはり来て衰へして
楽も時にしたがひ悲しむ早くまきわれ

上シテ
槿の花の上なる露よりもはかなき物は
かげろふのあるかなきかの心ちして世
をも秋風乃うちすさみ離かる田鶴は孫
を鳴く四手乃田長の一声をだにきゝ
ちぎりも知らであふなれなりきされ家の
住みしいにしへの悔しきを思へば悔しき乃
あるにかひなき帝都に越えつくるを

シテ
参る宮中ならし踏まれ参らせ世を移るぞよ
延りえぞしらぬ中かの姿あるいは
ワキ
さらにあらはれしかば　シテ　きはまりかくありて
上
倍も仏在世乃ごとく浄蔵浄眼乃ごとく
こゝその高さの七多羅樹虚空にあがれ
てかるこそ地に入りては火焔となれ
あるいは水をふむ事陸地のごとくなれ

忍ぶともしはやがてあらはさんかの
山彦の如くなりける山びこの聲も
かりしてあとにきりく 音はかりして
て法のくがねのさも冷き山陰に
あらしも吹きそへて妙経を読
誦すれば
早笛
後シテ上 鬼神に横道なし
かくいはゞいよ付そみなりまさる世
ありまや我こゝろ国土を守らんと誓ひあり
地 宝剣をもつて冷しく月影数あるそうて
松風拂ひをするよこしまなる悪鬼は拂
上地 為来き嵐のごとく鍾馗の精霊なり
地上 有難の御事やさては君道をたゞしく
乃ちも捲紙の内ちひらめき流るゝ
上シテ下 鍾馗の夢の鍾馗の夢はさめにけり

我と云し悪心をひるかへし一念発起
菩提心なるへし　誓誠ある擁ひ地を
て國土をおさめまもるへきに　禁裏
雲井乃楼閣あれ　ちりやかしこに遍
満し　あらはる玉殿　廊下はしらさ
隅々もとをりも　つきさをひきめ
てあのひくよあまかけり業れさらく

鬼神を通力もせをあつれわきとハ忽
ちすけつくよ切きめてやまれゆうちある
ごきつさはひ唯山つるて乃威をとなつ
て天ようやさ地よあ風神ごさまる
國土ゆたちなる事こそさまるまと申れ
すそしこあゆかてき様ひかく

右之本者觀世太夫織部
以章句真本今亦新令改
版者也
寛政十一巳未歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二條通御幸町西入町
山本長兵衛